

幼児の天性と自然科的保育

京都日影幼稚園 岡 本 あ い

■都會の子供は其の環境の影響から身體が虚弱なばかりでなく精神方面殊に意志が弱いと言ふことは誰しも認むることでありますが、尙彼等の大不幸は家屋の立詰つた、音響色彩形態等種々雑多な變化と刺戟とに閉ぢ込められてゐて、大自然に親しむことが出来ないと言ふことです。

■自然物乃至自然が知的活動の對象として必要なことは申すまでもなく、心性の陶冶といふ上から見ても是非に其の教育要素として考へねばならぬことです。古來の科學者文豪哲人の歴史を見ればこの自然といふものが如何に心身發達上教育價値の大なるかが分ります。

■私はこの立場から園内に植物農園をほしいと思ひますが、大都市の中央では何とも致し方ありま

せん。然るに一方私は最近に幼児が砂場其他で遊んでゐる状態を觀てゐました處が、別に教へもしないのにお百姓のまねごとや、草木の枝切れなどを拾つて來ては其を植えたりすることなどによつて言ひしれぬ感喜に打れてゐるのを認めました。

■これを動機として一方には作業教育の價値に思ひ至りまして、幼児の發達程度に適した、そして都市の兒童の缺陷を救ふためには、どうしても野外につれ出さねばならぬことから、豫て毎月數回繼續して來た郊外保育に多少の趣向をこらして見たいとの考へから。

■幸ひ平野に我が區内長野氏の畑有るを借りて昨年十月廿六日豌豆を播種しました。其の後一箇月を経て其の發芽状態を觀察させた時程幼兒等の頭

に印象を深めたことはありませんでした。各自が其の發芽を見て何共形容の出來ぬ喜びを表現し中には大きな聲をあげて喜んだものもありました。

其後數回の手入をして三月十四日花盛りに其の成長の有様を見せましたが、幼児の喜びは又一段で、自然科的取扱の有効な成績を見ることが出来ました。次で五月二十八日には畑に行きて豆ちぎりをなし、翌二十九日は其のかはむきをさせましたが、其の作業中には彼等は色々なことを學びました。中には想像を廻し舟が出來たなど言つては、ポートの歌を唱つたり、馬に作らうといつて脚を附けなどして創造生活を爲す様は何ともいへないでした。

■その日のお晝に豆の御飯に仕上げて園児一同に舌鼓をうたせ、幼稚園出身の第一年生や小學校の先生方をお客に招いて、家庭社會の實際生活を其のまゝに相共に楽しい集りをしましたが、一つの仕事から凡ての方面の教育が系統的に有機的に

行はれて効果の大なることを認めました。

○えんにち

……虫賣の店の隣に眼鏡懸けたくねんぼ顔の老人が三體千字文の講釋に入を集めてゐる。其隣では「ケムアルパイブ」とハイカラな看板かけて一袋二錢の駄菓子で子供達に大もて。「火をつけてはいけない煙草、かうして口で吸ふと煙が出る。」吸つて見せると生意氣ざかりの腕白童がしきりに買つて行く。

「生さらし餡」の幟のひらめく燈の下には「二錢」「三錢」のお客がたえまなく詰めかける。ふと母さんに手をひかれた四つ位の子の男の子が立止まる。飴屋の婆さん得意氣に餡を切りながら「坊ちゃん、明日からまた上りますよ。今日は一錢に四つだが明日から一錢に三つ」この子母さんの袖をひいて「お母さん、あがるつて何の事？」母さんは黙つてゐたがやがて「さあ、坊や、向ふの方へ行つて見ませう」と。

「母ちゃん、チン〜（自轉車の玩具）買つてよう!!」瀬戸物屋の前で茶碗の鑑定に餘念のないおかみさんに五つ位の子が聲を溜してゐる。「ねえ母ちゃん!!」かう云ひつゞけて、向ひの玩具店を見入りながら「チン〜」と口真似してゐる。買物がすむとそのおかみさんは「あんな物、繁ちゃんには駄目よ、すぐに壊してしまふぢやないか、お前には食べるものの方がいいよ」とひきづる様にこの子をつれて人込みの中に消えた。

風鈴屋、金魚屋、植木屋その店にたつ浴衣姿のお客、本當に夏らしい、本當に涼しそうである。(七月十四日)